蔵 12
881
29

野分　廿六並

巻名　細　此詞号之源氏卅六歳乃八月の事也　竪並也

花　弄　頌同

中宮乃御まへに秋の花をうへさせ給へる事常のとしよ

りも見所おほく　中宮　細　秋好也　宗　六条院にての事

色種を尽くし給　弄　色くさの事也

よしあるくろきあかきのまかきをゆひまぜつゝおなじき

花乃枝さしすかたあさゆふ　河　風流の心也　宗　触因之粧

黒木を残しあかきといふ事　細　皮なからなる木を黒木

といひ皮のなきを赤木(アカキ)といふ也　弄　同唐木なとをみては

なし　宗　或説ニ唐木又ハ染木なとにて有之但不用之

只風流乃心也

露の光もよの津ねならぬ玉かとかゝやきて　河　[illegible]

志めゆふ花ちるれんむやもしてや霧ハへたつらん
栄 まきをと志めと雲ふたちんも
津らさやかき春聴へ乃こゝを見るに　細　秋の聴残ら付して
住くらまなけ也
ちる春乃山をみ付しまて　栄　春の初まへ乃花園り丹を
うち覆くあき乙しへくもと其文橋の清るにんれ
うつろふとも也
もしうおもしろくかと、もあくうてやまあり　細　春の猶え
あるくうれるんのある也
春秋の何れそひま當よりも好りんかひる人をそく何すまゝり
あると　河　樹下集云 志らのいよぬし大伴乃黒主か論
哥のうこ
おもしろのめてたきこととてあるに春と秋とハいつまさきれる

春ハたゝ花そへハちまし聴へとも紅葉と秋ハまさまさまたり　三十
花 拾遺ニ九ある和り春秋ハいつまさるとと書出る読
てよみける　春秋り思ふられ西よ紀か何と紀すまる
川うつるんゝを　又云元良みこ兼着度のとしに春秋
いつまさるまへさ侍と宮侍まされたと秋をおしらう侍りとひは
またかたの秋りんゝそよめまして花見るとたハいつま
とうとちり
春ハたゝ花乃ひとへに咲くはかり物のあはれは秋そまされる
藤壺公いまた宰相中将の時應和三年七月二日被尋
春秋乃哥合れとあり秋のうちその日
花とうつおかきともみ付出れ春をもまくおほく秋そまされる
と案万葉集の額田王乃哥を始として秋ハしんゝとうもおほ
たるやすりもしおともしハおほさきなも三ゝ師説花も同し

なく家ものわきへ乃花そのみんてきしく〳〵　河　なかなかつ
枝構　露もとにもなく〳〵當前萬なれハ花もあるやうに世うきねん
又ひきくへしうつ乃き花世のまえ後にすなき
拾　ちる枝は思ふされてふ〳〵時ゆくつきりう使るところそ
細　時おりすりまさてなく世のあるひや
これと諸読しつきてさとみ〳〵給かと　細　中宮は花散里
俱久しくし給也秋好中宮の事を御覧して給りて諸里
六条院たちらにおりしまひ也
諸あそひるとともおしまふけしなれと　細　先坊の諸息月なれ
先遊なると都殿有也
先月ハ故前坊乃諸息月なれを　栄　中宮の父文乃月忌也
ん〳〵となくおり〳〵てあきくるしこれ花乃ささ侍るなしきも
とも諸くんまるに　栄　諸遊をもするらしかしきんなとそいう

野分ハ年ことにあるものをことさらにいとおとろ〳〵しく色くりて吹ける
河　八月大風事　仁和三年八月廿日自卯刻暴雨酉刻以後殊
抜樹京中人家顛倒内膳司東廊皮屋倒　延喜十三年八月
一日自申刻大風吹折木破屋天慶五年八月十一日大風暴雨
延喜十三年八月一日両京破損不可勝計康保二年八月
廿八日大風諸司并京中破損不可勝計永祚元年八月十
三日酉刻大風出来宮城八省多以顛倒左右京人家顛倒破
損不可勝計又賀茂上御社并雑舎石清水御殿東西廊祇
園天神堂顛倒一条北辺新鳥堂舎東西山寺等皆顛倒同
二年十一月七日改元為正暦依七年八月大風也云々
杜詩云八月秋高風怒号　細　八月ハ必大風の吹也家にも野分の
あるよしとうまる猿乃斎楷也乙女ハあるふうるあり胡
蝶りも諸遊しあるとも又まうるりし此等意有まさあう

あてハ尽期もなきやうなるとハ暴風あて秋乃花を源
くるしまるゝ事也縦しも天道ハ心あり　哢 同也ふにう
てハ秋をこゝろにとハなれんことに打まもるきさまへや
あれとものあひとハいとはしきをむかひしまあひとこそにある
まつをあやとあひさえらるゝを　細 中宮乃御心あまた一段と思ふすゝ
めてあはれへきや　孟 中宮の女房達の中にも自然に
萬むともきさ月ともにあさの人々けさ見るをよそなく
あひさやくや
ましてわかむしの露のむれを見ん為にまたに津んなどひと
あらへくや月したるを　孟 されたるむしのぬきさ見んなりやうにあ
のこほりや清んさうとひともあなへくゆくハむしのまこゝろなる
いへんまゝ羽をとなるみるに中宮の心のかたとこれをきえあき
あやうきをうにあはれさりけくてそまゝしてとの詞とハゝき

へられ花をとさかりとにあれな女房たち人聲らぬとまとちく
打まへたまひしあ中宮ハ清んまちひとしぬへく月し
たりやハうあるや　花 古と称恒長哥　むのゝとまきてこ
とさちくし霧を見へされて雲ゐ月のうこ
おもひたちとの袖をさ秋の空あらしとてそ月しさらされむかゆく
まくに物をも見んと様あ紀まふりしあ
細 大空におほふえの袖もかれ吉咲花をと思ひちくさし
秋乃空にしあとハ書紙をといふ縁くとむるを雪
いともつきされハ清らしむとも気りぬのようしろあたくかを
しや　むくつき　孟 打そえて　さとの詞也
花のうへをと打月しあけく　河 拾 さをハおもちて逃して穂
打まひそもしをぬ花乃上これ　孟 見んとしるをおもひた
逃はこゝまとなくお月しめきて中宮の清んあるへし

南のおとゝもせんさいはつくろはせ給ひける折しもかく
吹出て　宗　紫上の御方なるや
もとあらの小萩はしたなく待えたる風のけしきなりお
れかへり露もとまるましく吹ちらすを
河古　宮城のゝもとあらの小萩露をおもみ風をまつこと君をこそまて
そのまてもとあらの萩とは古草乃残りゐるにさけるを
云也是ハ本萩とてことしおひの萩よりも枝さしあらく
くしき物也これか中にも大小あまたありちらさぬとも
とあらの小萩とよめり一説云秋深くなりて下葉ちりて
遠(スキ)くるをもとあらの萩といふや ことにもとあらのきくさ
をも云とまうすあなるも申あらはにこそくしき也とも
細　門前風を待ことゝ君をこそまてと風を待と言へる人も多
野にまたといふもさうれといふのいつくしきなとゝいふ也

宗
前にも紫上の御庭をも秋草をうへさせたるとあれは
又ここに萩なとをもとあらとのたまへるは其心をも猶
見えたる宮の御事をも風を待ことく君をまつと心にもさきたれを
宮は小萩乃まちえたる風にも似つかはしき事かなとき
きとも也
またえうちかくあなたの給　宗　紫上乃御事也
おとゝは姫君の御かたにわたりまへる程に　宗　源氏ハ明石
姫君の御方に渡り座ある也
中将乃君まうて給ふ　細　夕霧　宗　夕霧紫上乃御方へ参
り給ふへし
ひんかしのわたとのゝこしとみのあはさのあきたるを見る
さしとおもふもとなくたゝすみつる程に女房のあまたあるゆえ
たちとまりてなとゝもせて見ゐる御屏風もかきのけてなき

夕れにもしたくこゝろをこらに見んと紙しあしくしたるかさし
かゝましに　弁　雲雀ふ出にゝ夕暮の紫上を見かへるにけり
あるこゝろやうしとハつやうちするにや紙よりはうへより見
ゆ何一簽常に磔るをと見て陸奥をときまつるやうへを
ハさ由りもるにようてこれよりのちくとこるや志つしくた
上乃字の如くへし　細　紙なれあしくもとらや
両語ハるへきのりまの寄るへくと何しほきくうくこゝろに
さと白ふちくしてくる此所のつきまつるをわもし
ろき　両語ハる人　宗　紫上たるへし
うつさうしのさしこうれするを見る中ちもおちかちすく
見まはる
河　深こゝろと春の霞ハ時く出ともこかれく出ゆふうて桜の郎
出て桜ハ花のころすをとおもてゝとおもし艶色ある花也

和名なれ朱桜とあり古き物のなかにもさくらとあり
細　うすき紅梅のちるへし古きにいへるうへて桜乃ゆへや
孔　山桜やうへのいつの有也　宗　たゞ山桜やうへにへるすし
とや
三めや花よたちこそふ夫霞のそれかと見えしゆきほのくも
此夢の此詞を見て夕霞をよめる也ちりん　兼引奇
我かめもうつくるやうにあハ行を白ひくるとみちくめつゝ
しきへの浅き由ありみ花紀何まくるとへくと言へく
宗　夕暮のうつるこゝちうも似とや
いへにあてるにかあらん　宗　何ゆのい出てもまて由との詞也
うちすこしひ路へるいとけしう見え出されけるとふるしかう
てこゝ見へもていう路のほわまへたるへくも傍さくてり
こゝろきたるをそくてやとハ見んまとさるれと

うちかたらひ　細　紫上也
めつる人もあしもおもしれいとをこ給くたるなまてな
し給へるそ　宗　紫上たるまゝの御かたらひなき加へし
そく見る人今はなきとおもへるしきはの程をいふをみるさき
院んなくまいらせ給ひやとおほせもありきやとこしらまを
をひおそろしうてたちかへるにて　細　見る人の心とくみえある
ましきと源の心をみるまきにまはんなくおほろなきりを
見まほしけれとも夕霧也
あかの院ならせうちのこゝろしのさ給ひてきゝ給ふ
宗　姫君の住みてうち源の陰子と給ひて御後とや
いとくそあはれしき風なるにこゝろしてよきの
ことにもかるかなとおもへはてあれと宮の御後を
細　源の御　宗　源御後くの給ふ也

まゝとなりてこれは　宗　夕霧の源のさまをみ給ふに
なへし
物をゆかしくておもしろくなりて見まほしき給ふらんとも思ひ
えんもとくなきに給ふめきていかしき給ふらちのさまも
ありぬも源ひなのひめかゝりのおほゆまとこれとも人の
にみなしむへうおほゆまゝとこれよき夜のきんのしらへ
も吹き給ふ　物をゆかしくて
宗　源物もの給ひて聞えてはまゝかと見給ふとや　細　源紫上ともの給ふを
きてるにもおもしろけれは給ひそらしてたちのきぬ
宗　夕霧此のこくさ夜の見んとや
今さらにまゐるやうにおそくはかりてものこれかくにおもへいて
給へまいりて　細　此ときのまいりつる程なくして夕霧此さるらく
まゐりつる也

さればよあらはなりつらんとてかの妻戸のあきたりけるよと
今ぞ見とがめ給 花 夕霧此事をかくして源氏かくの給
へし 孟 源の詞也前よりのことをおもふらんとの給
し詞の貌合ゆるされしこと書たる也
としごろかゝる事のつゆなかりつるを 孟 大概物あらく紫
上のおもてまかなの事あらかりしに驚おどろかせるも夕霧
のこと也

風こそげに巌も吹あげつべきものなりけれ
細 海浪無益たゞ風のちからとはいふ巌をも吹けるまで
までのたぐひといひておほきなるまで吹といへり
紫上の面影をもおもひしをも見るまじきをとにし
と見まほしきうつくしさを風の義と吹あげたることし
とあり 孟 清濁(セイダク)無説存之

さばかりの御心どもをさわがしてめづらしくうれしきめを
見つるかなとおぼゆ 孟 源紫上の事なとを夕霧の見給て
めづらしきさまとおもはるゝ之給歟へし
人ゝまゐりていといかめしうなきぬべき風なりつる
孟 諸家来のへく来たる給ともこれ風は吹ぬべきといふとにや
あるへし
うしとらのかたより吹侍れは 細 南はのどかなる也紫上出 孟
月なみてわりしかある所さまてみて見したりこそ
東のとう殿也
此御まへはのどかなる文なり 孟 南の御殿となれば良の風はさ
明とあそおはしぬとの事とそ
むまやのおとゝこれをはなとの事をおほきにあんとて
らく事なてなむのしる 孟 良(ウシトラ)ゟ吹あるまさるなれ

も風おこるとてまたてまつるへきをとをる物へし事なとこそハ
のくるまやうにとの〳〵馳走して風をさはく猶物へし
中将ハひとりまゐり給ける　細　源の詞
三条の宮より帰りつるを風のさく吹ぬへしやとへのやうなれと
おほいまうちきみ参りて帰り給ふ　細　夕霧の詞也
祖母の宮ハよりけなくおそろしとや
うこにをきましてんほとくくをのやと共もとより宿りて
宗　大宮の風よりおち給へとも又夕霧参給はんとや
わかきこのやうにおちまとひ給へれとふるしきにまかりてくるなと
むとや申し給へと　細　ものおちもとし給へるや
きにちやまうて給ふはいまさてまくわかうなると
世ありあるましきことなれとあふさのうちてそ行かれけれとあふせ
さうゆめて行てかくさせうしきに給へるを

宗
三条宮へ源の御訪ひ給也　宗　大宮へ源御せうそこの詞
あるへし
あるんらつへハと云ひ給へゆかりてちらんとかせうそこ也
もち給ふちもそろそろともみたる風なれと　宗　朝臣とこそ夕
霧をさしての給へり
うちつけく物し給ふ見えて　宗　夕霧ハ宮へまいらんとはめた
る詞也
三条宮と六条院とにまゐり御見舞せられて返し給ぬ日なし
内の御物いみなとにえさらぬ御事とものあるをと
いそかしき御日にやとせちなることのたとひかへくくとし
しもきんにゆきもみてとも　夕霧ハほとめあるうちや九条右
丞相の遺誡に曰凡非有病患日日必可謁於親若
有故障志早以消息可問寝食之寧否云々　宗　夕霧

ハ毎日六条院と三条宮とに参り給ふくま見えし給ふ也
日毎にとやかく日の程をふるまひさしをきて孝行(カウカウ)第一の人と
いへり
此院へ参り宮へまうでをもいひて給はれはまして夕霧かくる宮此
大宮にようみえ　孤　六条院又三条宮へ先参り給ひて後
出仕し給ふよし也
夕霧のきぬあくかれはつき給ふもあはれは見ゆるもうへと
うまれつきのめでたさまちうけ給ひておとらぬやうにひとり
まさりくさくしきほどあふこそあはれなりつゝとてきこと
あくきにもあるまき給ふおほしめさるる木の枝なとのわろくなと
もいとうるてあり　孫　夕霧は孝行の涙と気よみゆる也
なとられりく人のこゝろをしくなれちゝまた　細　瓦(カハラ)なとと
いも落也　孫　涙そんともあやうきにてありける を

此は夕霧の給ふ也　孫　三条宮は見奉べし
かくて物し給ふこと久しきのことのゆへ　細　かくてまうで給ふに
まいり給ふをもしろくもあらずくさ風まへのやさしと也
孫　此は此おそろしき風あり大宮は涙ぐみさせ給ふもあはれなる
見給ふ夕霧の心のうちへし
そうくにせうとし涙ぐみ給ひのことのまして此君をとゞめの
もしくはおぼしたる　細　三条宮のことや　孫　故おとゞのお
りまし時をかゝめしくりしもかうとへとゝまりもあるさ
海みて夕霧あるまとそのまゝ人のまさひ給ふの心也
常なき世なり　細　猶涙ありしへ參て見奉るとかへり参
なるゝをもまかれなる心也　孫　うつりかはるのをいへり
いまも大かうのおほし此こともて給ふのかはりなきれと
孫　大宮の涙いまかひあそもさる給ひそうのとあいはあけきとなれ大

任度の立遅れ時より見しハ其のまかりたるよしなるん也
内の御とうれ院御心ひハ中〱もそろしうてこそ有所なる中
物よろしきをうう御ろしき人乃をとこゐもをさくるも物はちをれ
すこうろまゝきて　細　厚くてあるとも　宋　内府ハ宮乃
院ハなるれとも是れハ様自うきく見て院縁の夕霧
ハ中〱に難しき事也
うひとハさうふ人の後とも見さしとをうきて有つる　さふ人
細
雲井居也　宋　雲居雁とも夕霧ハうひ〱しう見し給ふへと
されハ後とうきてありつる院両親とそ紫上を乃ん物語
しをと見ゆとも侍るまいしきをとく御そのうしてまうさう
ちをきとも様おやめく〱に心おは侍るく也
院両親の上に侍しきぬとうき心に御恨ゆるんそ有事うしきさる
ひとしてそろへいと御そろしきてとくそ見うしさよかるう

ワしきと事にさひとつ事ともすくしてゆる見おろしいく
院両親　細　紫上乃事
さしうくこゆくもとくうをとくも物しく行く給ふれ　細　さくくゑ
き紫上乃院御孫也　宋　古といまくし紫上御との姪人ハ
有うるとのん也
うに院すうし見ましてをんうれ院くをきの御めて立
あらひ給へるんきらし人あうりとかりやあるいと物しと物語
ゆ　宋　花散里のゝとも源氏紫上のゝ事も姪人ありてましく成
をも院あうしうひするに花散里ハかうもとううしぬまゝ見
教すてゝとさるゝを行ハ斎宮うちあるとのん也立うりてハ夕霧
の花散里をいとゝしきをとも心を笑止（セウシ）かとのん也
おとうく院んを人へと　細　花散里ともうらまつらくとそはゝ院ハ
あうと様のあるはんと父おとゝしとさ給也　宋　花散里乃

それほどあるもあはれなるうちとけとも思ひよりなくへて古説に
ある源の御心の有さまなれるなどゝ夕顔が思ひし給ふとも
あなかしこ此ひ思ひしり給ふ人かしれぬとまめやうなれは哀を
あはれまて思ひし給也　花　夕顔の宿は源の人なれは紫上を
見給へくみきもあはれと云ハ思ひよりし給ふときゝやうならん人
もかくれなきあはれとハすくなくひなきさ也
細
夕顔ハ宿の人なる事にあらせまし給ふやうなりあはれ
こさかりと云給也
きやうあらん人をとてそれならしく思ひかくわりしくさあ
源のあはれ今は給も心にもしはなかりしものひなんに
とひしつきて云　細　かくのことさへとてそとお思ほさる也
花
紫上の御事の夕顔かは
暁くさに風もまし云ありて　細　京の御ありさう

むらさめのやうになりひゞく　河　白菊(ハクキク)　暴菊(ホウキク)　急菊　皆門
六条院あたりにはかゝるやうなる事もまれなりけるとなんくはしく
風の吹まよふ様にと　宗　三条宮あたりて夕顔に人の見しあはれ也
あはれくさくしきありさまに　宗　六条院のひろく
たゝさにある風のおとさへしらさり
人くるしきあはれまに思ひしらぬさうにつきてもあはれなる
しれまちなるをハ人もなくなるに御心されつらんとおもひとる給
てまさかのくときさるに　花　源乃おりしまへは度もあはれ
にそへてあはれなる也　宗　源氏一代まてしきさてもはなきに
つくへたりけくて風をも知らぬ花散里のはからるにそ
人をもなたらんと云夕顔乃心也
来り給　宗　花散里は清まへ夕顔いつせ給とも
こなたの宿よろしき事いと思ひやうにありける　宗　夕顔は車へ

入あり
さられぬしきをおもふこゝろ有りかゆしく行くされあら心ちし
て行くるけるや　細　生上の浮るなや
又わりんはさひくらく残るこゝとさひいう其後　宗　夕雲の出ん
八雲井居あるに又生上乃はるゝ西致のくもらさそ
出たるく空のなや
いとみけちるれるすありけのとおきなはわらわしとと枝うり枯
りさひつく朱乃浮ることはまゆまりて行ふれと　宗　秋よお
庭せぬあるとくいふへしは叶あや
おちゝこしておりしあるに　孫　花薄里ありさ夜おとされくる
ひきてくるようしや
さうく雪のちくさあてくあいて行く浮くろえいへきは
あるとかひときそてみるそ見人のおとくにはまうり行つれそ　宗　夕

雲の花薄里れ風りおちらこへいたや吹きしきりしとの
行てんをちくさぬ語と也
みうしをまゐりくもておりしまゐり　宗　一葉もおきてくる
さぬことをいう
はまたるうらむありそくるまて乃んよるそせて　河　高欄（カウラン）
宗　源のありしまいとりのこゝんり夕雲れくるるく
おりしますさ海也
山乃本とともあれなのひりして枝ともおほく行きかりした
里あはむしいはしにとかりほひりくわりくゝろくのあ
てたとりんありんるとやすれ枕おかくく　山乃木
細　庭の山也
日のさしくれにけし出るにつ連へかかたる庭の霧はらくと
してそうしいつとえくこえをる残るに　細　草むらの

あるにもあらぬさま也　宋　野をなれぬ秋の夜の給ひとかう
そこらのたゞしく源の女つるほどのひかりしあはれ
かふさ給へ連て　宋　雲井の上のことにいとくらしあそ
細　夕顔の様也
中将のこハはかなきをみてあはれ　細　源乃詞
秋ハまことにあかりんハとて　おはき給へり　宋　源氏の給ふ也
あさましふみあくしんて　ゐせてをくらうらく
ひ給ひて心あしさに　せたてまつる　如あし
細　紫上とものゝ給ふもしらぬ也
あかつきのほどよとあらくひ給ひんよんとて
花　花ハあるましきをさるれと紫上のこと給詞也
細　源のそれの給ふ也・宋　源ハ秋なく給ふには
あはれとも中将の給ふにも氏ともとあらひ

給ひんるとくきましき給詞也
せんなかとくひとゝの給ふをひとゝもひとまねし女の御ハ
らへも給ねとほのぐしきにそきつかれ給ふとめてしゐお
ましきに　宋　さらしかくひ給とも　源給の人興か給
その給如へし
ゆるひをそ御あなくひかれとさくあ給へり　細　さよはあ紀
御ゆかるひとや　秋　源と紫との御中の事　宋　ところ
とあらなんや
見ゆらしと見らくひきなをも給へも　宋　源のおも給也
あたりさかさとゆりいきにのちのさて候へくひ給
細　夕顔れさりさきてや　宋　源乃こと付給ひおとこゆくて
給ひまして夕顔のたちのさ給さ也
5 いかにそよ人宮ハまちよりくひ給ふや　宋　源夕顔ノ為

祖母詞也　細同
志らぬれきことにつきても深くうらみまつりし給へと
細　夕霧乃返答　栄　夕霧は大宮ならずと源へも語詞也さる
とハ源氏の語らし大宮よりも深くひ語しとの詞也
いとあひんにしそ給れとや語へも　栄　大宮をとりわしく
さひ語とのんや
ろくひ給て　栄　源の語さ後也
いたいしくもおもしきあやうにはうらみつりかたくなれ
細　源の詞
内のおとゝをこまやかにも宮へしうらそ　細　宮も常
ありの語へるや
う重之給しの　栄　大宮此義とも源よりうら語しハ後々の
内府ハさまゝくともおもしまうさぬようしとの語也

人のしあやしうもれやうに　細　内大臣のうちと源乃の語也
ねくしきまりつるて　栄　男しき後とみつり内府ハ親
ちとに孝行のうちとへいひもとゝくして真実のところ
ほしきをすれへさや源氏乃語也
おやちとの語るとともみつしきほとそそへくへ尋も
見んおとゝろうさんのんおりまゝとに志そて子ゟ孔子てあさ
人もりをん物をゝこまる　細　こ後ろにしともあるまゝしうさ
につもろさおしてもむさそろう乃孝ある也や
さうはんの後おほくいとうしこう孔人乃をも志の
まてほし　細　人ま必さくうちみ孔子ゟ行乃へや　栄　人のくをと
ハ秘曲（ヒキヨク）のあるやもされども内府ハ末世（マツセ）不あ道の女学
乃人とや
きくひきくう時さみちしうしや　細　うちあくしさや　栄　真実の人

なまめける人と源のうち給や
人としめかくちうんなれハうるさきあるまじきとの給ハとおとゝ
おもふらしつる風かり　細　雛のちる人ハ様あるとや
栄　世上の人ハいかにも雛ハあるまじきとや又内府をさしまし
て源氏のゝ給ふ也へし

中宮のまうらしさ　宮仕へさるをとめてひつしんやうして
栄　中宮の大夫なとくいふ他ありあはひく風もあまれ
あつらとも夕霧して　好色之濟性ある也
ひそしてのせらるゝ給　細　夕霧を性まちせ給也
よろ風かとも現をもいふくさうかしつらん哉力をさ思ひた
細　源の祠　栄　源のまほ夕霧を濟支なての類也
おもてありひ給ていとさへうるれり　細　風のんのおもはしひ
かるや　栄　持病（チビヤウ）の風気（フウキ）にとめの身をありさまるをわらふさ

あるとや宮中宮をとうかしひ給ちる御様り絶病し
ての給なるへし
さきめくひ給る限とおもんとて宮のおほ中ねたりて出かの
殿うのありまさとりて申まの給　なめしひ　細　養性
して出るや
わ(?)ほくもの事もうひとめてたく　細　夕霧のうちうちや
わたしきをある東の方の御前そそありたちうく　栄　夕霧
の中宮へまいり給さ垣をとりて
おまへのさまとこ中り給へるはうりしろきまもちるまあけて
はのめ事る御ほくもの給り　栄　中宮の女房しまはりふや
こはまてなきてへくるさをかうちんまとらしくるうてこと
かやうなるうかるまおもまなとこもうちてとまもくあるはいつくあるらん
細　中宮の御のはくる也

さやうなるわきまへなれハほどもなくあらはれてさらに何ともなく
なりし　これ相目のやうくあらはれたるにもあらふ
又わきまへなれとあり不審也一説云八月の日部の中に出
たりと云ふと此文ハ絹香暴雨後蛩重雲夕霽蒔陰亭
秋晴ひとへに何きくれの空ハいとゝ冷かりに
見ゆりされハ何となくあきくれと云ハ相の心をさ
ゆるてといふ寂不ニ知婦笑　細　さもあらすてあらゆる
さんさハ物しねとよ心ゆきゆくしさんさもありちかきや
宗　また夜深時ふけぬれハたゝしくに見えぬけしきといへり
拾　秋ほしまて日暁のこゑさえや何きくれと人のいふへし
まことへおもふさも行てむしぬこゑに露をもうけゝる也あり
河　蛩絡離落ニと詩にも作ける
さまんあてしこゑをきゝすえわたりさまに　松　さもさんハ落

是の心也あはれしみしと秋の感ある七草のめてたきあり
是さんハ蒲芝の名也又両藤芳裏萩薄とて草也あて
しうそん紅梅ノ色也かさねにもあらさうなる事也あるへし
をさなへしの名のさまにやられとそれりあひらるゝ庭あり
立へるまてつまてなくしこの草むしろにもりてちるなるとも
ことをまて花さくひあてしこゝろとの
花　女郎花ハ両色にてまたねき黄にたる色さ也
松　女郎花とハ両黄さ也　宗　くるしさハ童女のやう
こゝろね也時分のひらるゝも八秋の草花の時分あひらる
かさしれ也あひとも也
いとあれしをあるゝこともちるをまてまちなる野のゝ
是　細　風の吹らしきられぬる也
いとくんみそ見へしある　宗　風流なるさ海又こゝるなる也

吹まかふ風ハ侍従のよしとくに白かくんかうれかりけると
花 かうのかほりも無くて侍従乃方を殊さらに中宮の御
ちかう寄にかまへて焼物の香をとめてをかし無る也
荷葉ハ麝香乃まさりと以つるまゝ入ゆへとぞ
翠 梅花ハ同志ゑんの花乃香のたとへにしにて或本ハ紫宮家にて
うま或本ハ侍従黒方可然とく 細 此説にちかしや 栄 梅の
焼物也中ニ夏乃侍従の方乃うしろへくの侍従乃香ま白ひのち
名さへ海也
かねたひ行つる法声をひかやとぞいひかりかてたくんまさ
うせしまりてたちかてかくられと 細 かるまのひ行とや越し
てぞ袖かるくちるとや中宮乃法名をまうひも立こひさる
ちかとや焼物のかかひ立るへし 翠同 河鰐やなとひハ羽の
名をきてまでやとゝちるとゝ云へくとし 梅くのむら乃法白ひと

初はゆる也
無ひやうにうちきとまらひくあゆミ以て行つるに 孫 あいって也
あとえ深くるやうなるに 栄 志川夕り声信する様也
人くまさやうに君と乃きさうめに無き物いねとこれまくりつ
ね 細 夕人房ハ侍出あるにちちかる也 栄 かうくとハ勢
ね侍まふるへし
侍まりの様るとまくハあらしにへさらるれ給へる女房を
とといへときうらくハあくまて 細 へ内の姫君とハ女房某
殊あて女中へも内侍給ゆへまから給ハ侍る也
侍せうろくまハせまき給く 細 源乃侍従侍也
宰相の君ハ侍従るとまかひきまれと 細 二人也
まさうしとを無ひやうにうちらひ給ひ 細 物緒あるし行也
栄 侍せうつくアしさを行て侍在るり給あひくに宰相

内侍なとハかくしことにもなくみな参り給ふへし

これもさることなれと　弄　夕霧のかたり面白く思ふにこそおもし給

しにさハることもなき事にや　細　紫上よりもさるかたの人ハあ

るましくおもひしにまさる事もなくて上臈しきを

云成へし

まさりたまひけるとおもふにも　花中

紫の上の事也　細　花宴の説あるハ八月上臈しき

をいふなるへし

さまく物にまきれてくる事のおしくもあるをしかあるまし

ましてかくハ久しくかさりたりし花とも色も見えぬ

やうあるましとて思ひよるへき給ふに思ひやられぬ

行ても紫のうへの事を思ひ給ふ　宗　紫上雲井雁なとのことをも

寝の次第をいふなるへし

あらき風をも防きつへきやと　細　浮世なるをも源もう

の浮世とつき給ひしとや　源の心をもとてゆきたる給

りんと給ひしとや

わりなし御心にいかにおもふ事も有けると　宗　わさとなくまく

心得てかくし風のさそひ花をとゆめてさいふをと給へ

たちまちさのみ給ひと浮世の夕霧のかう行也

つまなりんかくさま給ひぬるも宮の御事給への連え　細　只との

浮雲作也

あやしくも行給ふにおもひけるなる宮なる女の心ちそ物打さる

くおほし給ひへの浮世の程のさ様なれハまさにありかたく思ひも

おほいてんとてやうやうてまつり給ふ　細　源の君　宗　あらくさひ

さいふのきの間也　我おもろうすゝめるやうに中ゝおほさ

ひとへて源氏物語とも

涙のまへしるしとなりぬるやとてみそぎしはべりていかならん
しらさ涙ハ了ぬささらりとて　宗　源氏中宮へ御出なされて
簾(レン)中(チウ)へつかはさるゝ歌也へし
さしかたはゆる涙袖くちハ御そゝをあくめと云かり
細　思ひ出る人ハしらぬそしあしてはならしと也　宗　思ひやる人て
あらめとの夕霧也んや
むつかしくなるらんらさらをもつてあまた　宗　此の字之
拾　同じく文説り何と云ふ事也用とゆう作者此の乃可
知りや
ほのき歌ハかなへり何度治ろうかんなるとかん給へ　宗　思ひの
涙の夕霧也んからぬれ出ひまつらにハなむとそてよ
そのこと涙ふかきことの様也
思ひく中将乃涙さきの事をなく了はきそうとちなり那

宗　夕霧乃御さ乃まへ海をと思ひやりさらやまさて源ら給
まふて参りきひたまへる人さ御とをかくさまりうくほとなる
名也　宗　夕さうら紀綾有るにと也
心乃やみやとて　宗　中納言兼輔思ハ親乃あはれやとの心也
人の親乃心ハやみにあらねとも子を思ふ道にまよひぬるかな
かの涙乃目ハかりくらくるしやそ給へいかりのいとひきる
あさくし行て　細　草子地乃詞也
宮乃御ことなりつるそうつくしくそてあまた　細　源の詞　宗　中宮
をとも源氏そら給ひて御あさくしやハ思ひき侍る乃ひ
御気色行給へし
あはれなるをあらしハ御ゆへくしさをかなし行ぬ人の行くゆ
かしくん涙のひそて上給ふへし　宗　そま紀綾されくるしき
名をいたけ思ひと也

いとおほとかにおかしきさまにて 宗 いつれもおほやうにおかしきさま也
をしはかられてそおもしろきやとて行給ふ 宗 文をきゝ給ふとき
たゝ雨も中宮ハ行給ふまじきとや
中将なるめのとにて 宗 紫上也おほせの様にも夕霧おもへかしと思ふも也
とかくめもおとろくまじき文あそておほ給へるをも
宗 やうても源氏は夕霧にむかひしの夕霧の御様也
ふるき人の御めあまた見給ふなん行くくつりなつましきの
風のまきれに中将ハ見たてまつりやしけん 宗 源の御心也
紫上を夕霧の見たてまつりしにやとの御心あるへし
彼戸のあきたりしにやとの給へる 宗 夕霧は紫上を見ん
給ひしも
おもてうちあかみてそ見えける あやしくおほえて御覧しけるに
ハ人のおともせさりしものをと聞え給ふ 細 紫上也

御かうしまいりなとして中将の給ぬ 細 源の心也
みなうちとけたる給ふを中将やうやうのくちおしくの
きこえたるにつけてもあやしく思ひまよひけれと
宗 源氏中宮へ御出の様也夕霧も御供也されとも御
中将ハいとゝ給ふへし
なまめかしきもちてなまめかしくてまいりより見給ひ
御給へりこなたやうやうつれつれてあはれの御方
そこより給へなとしてあやしくいかなる人にかと見え
也 細 雲井雁也
御まへなるもほの人あまたそ参れるにまいりておはしく
こまかくあはれなるかなさめもなくさめてこま給
とうめきたり給へる 宗 下もこれものさ後すや
まいらるあさらかのをひましたる給ふも 河 詞膳

弁 字たまくに読むへし一首
これちりこされ有るをとらく引きいてきわめぬるなるへし
まのくわかれりおほしかるまくにさうつこととうきさま
そうつたうしちりく所給へるに清さ紀なと契乃ためれも
うちこもちなへるあるもとうるに 呆 明らにハ何時源氏物
出るかれとも此ゆゑも流るる極まりしおりしまへに
とや萩の先も廣の東京街乃まとひなり枝なとう
ちなとくせおりて又出ともこそ極まり細なり
うらさ記きおもして当ちめ乃ひともある 花
うきてるを引おもしてきたる心するへし 弁 花の
心也 細 明らにもれあるさ海也 弁 花る二夜架よりまさ
家引おもしてせありめたく引きいてきくるよ
しもしとさし斗れ礼めや 呆 うちとまとあへなる家

もうらにうちとそたる極まれハもとそなるへく引ちを
てき給さ海をとおつるあや花るよ夜架より引おもと
そせりへりそれまとちなとみえう所る清さめて明らに
乃萩も此にはうひかりおも遠きるうなや也
いとへし 細 明めるる也 呆 第子の地乃祠如へし
ちくのうるに清い所給く風乃さうれなるなとうつる所給
てはれるうたちうへり給 呆 源の清き海也
心中ましをなる 呆 明らに乃心なるへし
大うろ萩の来なる風乃声もうきあひをうつまさむなちて
弁 此奇珠珠請あるも聲ものうそをなるに此有太うさ
とゝりまして聲あるを乃るのも下乃のまあへし
細 源の声をもそうう給とある也聲とふをとしいうて重
極珠請也 呆 明らに上手也聲きあのことを一向よ心なるを

しその秋はきこゆる風も物ごしに我身をとふらんに志
むやうなる心也ましてかならずといふ心下にあるへし
心ぼそうこちなきまめみえてあきおそろしと云ひなし
後なる事ありに移きくしていまそうかなる事を後身をと
なりける　あかたへ　細　むつかし　米　武蔵のうへうき
より浮出ぬへし
またくし見されなるをひとへとの後へハことにをととせて
いり給ふ屏風をもこされてここにきたまの志をきなすくし
あしあるに日のかたれゆへにさし出さるかと　花　明けの方
へたるも後とてハ随身さき銭あつかうと前れうちあり
てかゝりなれ人まうをかるにももあくさきをとらえて
心の移也　細　同家の中なれとも
あきくとものこそうきをなるほましあわの移へり

けさく　米　さこやかるき後なるへし
ちろくある後くまん乃風ハつきてもれるかしきちちよむ
くしう空しかきさかれ給へと見ましいくうにそ心ないひく
米　かなるをとろきにむ武蔵ハ源の空かれ給也
うちかうきれてこそこふひの風あも　細　むつかしの詞
あくうれなるほしく移つきて　米　いけるへとゆかんと云ひ
しとや下乃を源の番にうむつしきん也
むつるを給へえいとよくおけらいひ給て　米　武蔵丸る
たちへ後きあとみへり
風ハ次きておくの遠給ひんやうろくしうらん　細　源乃詞也
風あもはくうれ給へいさるにハあまるをとすかうろくし
かるへきとや
さるともとまるかくと有なんし　新　武蔵丸とまま

まさなる人こそたゞかれ給しや　細　心うちとまる所
うけ給へることゝや　孟　内府まうとの親まてまうしまうを
へたて遠く給ひおはしますやうにうちさりき給ひけんの
さひしかるまとの詞也
やうくう源氏むすきてそうひとりわれしとりやとの給へ
ハ　孟　玉鬘の姫君をさやうみえあるらしうらしうとのこと也
ちゝ内府へ渡り給ひしとの源氏のつきたるまと　源氏
の給詞なるべし
をさやおやしくもうちささうしに思ひしみもるるとおほ
してうつくしもうちささ給へるかとわりしきこえおひつゝ
はきさすり　細　おしく思ひぬると玉鬘のこ給也　孟　源より
さるすとんのまうしの給へるにとの玉鬘ハ心也
はうつきなるといふめるやうにかくしうとのうれるひま

ひきしかるかおりひ也　河　燕名苑云酸漿一名洛神珠
和名保々豆岐（ホヽツキ）　赤酸漿（アカカヽチ）　日本紀　かゝつき
まつこれおはうりらくくうれるそいとし給ふあたくかくさ
ふとけるそかけへは色ちらんなるへくもはらしと　細　みくや
うれるも　孟　ことゝおるるめつひあるとすや是ハ給うの
ことにの給ふべし
中ぬいとこ度やうに思ひ給ふをとりて此清うるもち見てし
うれとさひかるらんみてしと此うのこの八条ハこひあそる
しめをみ紀をやそっうきさあけて見ゆるにまうるゝ物と
もくらうさゆりうれいつとよく三色くたそかれ給らしき
かまなるさもおやしれ見さや　細　夕霧也　孟　源の玉鬘にた
そかれ給をゆ霧に思ひて玉鬘のうちもちを見てしう
あまさふ也

わかこゝろならすかくところせきまてのちのかゝるへき
程のさためなきぬるやつまと思ふらんと思ふらんかれとは
やしきに似も思ふさてなをきこえれはうらかくまいり
まうしそてなを思ひつゝこゝろをきこえかたにけふれ
なかうちとくくも心得ぬ所ならぬなとのとも思ひつと
思ふかうしくるまに心得つるまくなかしさはいつとなき
やうれるはまし御まゐりかゝなと思つゝそ
わやと宿のなかし　細　夕顔乃不審し給也
事となれくしきにてそあれ　細　平生かくなれく
しきことや　栄　夕顔乃のかくし給ふわかしはやめくにめ
心ならすかれ給ふともなんや常に法ふ調りしてとくる
うなとく心かたにようかなり
心そわるまてかれるともにかゝかん　栄　夕顔の心也

親王との給くはやうに似合ぬまつまてひやとはきこえ給
ゐるあるへし
わかひうしぬくまゝなくおもてしあるほんあめて　栄　源氏乃
給ひしいかなる人まても色のこし給ふぬほんそとの夕顔
のんや
もとよりきこえれわかうしなて給ふぬはうく御法ふひそむ給へ
なるあめる　細　幼少の時より心さしなすれあめそふうち給ふる
なさとふ給や　栄　源ても思ひそてそふて給ひぬ人なる
ゆへにて程よきけうし給ほんのそふりかや
思へなりあやや　栄　玉鬘のさ後藤人なれも源のまさう
し給ても原理まで有さも夕顔ないとふるをと付て思
ふなる人しうへなるまそうとうきるものもおりも思へと同
し事也

あさましと思ふ心もなくて　某　夕霧此ケ所にとり
とりにたるを見れ給ふをかたくあされ給ふ心をなんかくつ
うしろめたと筆者の批判也
女乃御さまをにちらしうしろ安とも見しのさまてことも
らうたしなとおもひ給ふさまとも見給ふらんとせられんとお
ぼゆ也　某　夕霧此んも紫上源の御子との給へる説ハ花中也た
とひおもくいつくしとも見ゆへくの服なりとも物かれ
んありとしも此のうちにあはれなるにはいかにしもとも也や
河内本紀同腹服同なりとあへらうかしとも猿の紹を
一服の兄中男も似て物語の一服なりしねとも元中と
なりつかしとは心をも有
そのかくしは常のひめくをおもひなされと　細　紫上や
某　紫上を眺めけるかしこちは思ひけるとや

かなるにこそまさるしき海ハ心ちもなくしひぬへくこそ
某　紫乃空貝ハ紫上をもおもひやるまじきとや
八重やまふきのさかりにつゆのかゝれるゆふはえにおもひよそへ
見とおもひよそへらるゝ　某　紫上は春を好給へれば夕
霧此んも前まにさくくわりの樺山吹の御さまなるを紫上ハ
まくつゆの給へる花をも見と宿りしおもひ出給ふとも紫上を
春の曙の樺桜またとくへの花はさる花に似たとへ給へるた
秋なれハ中とおもふ給へる也ハちる如へし　花　紫上の姿を夕
霧のおもひなぞらへ給ふ御詞也さぬくゆりの御さくらのまなか
くあはれき山吹乃花此御さまなハかと云ハまとありき
給ふ人のかたちにさまをかへて有りしを給とかへなされと
源の御心あはれ山吹ハ紫上を給ひなる也と給へるや
かゝるにハたゝあはれをもそれとならちかゝ御ゆるやうな

玄
地也杜若なれはなり　宗　とは杜若なれは山吹の事とへ似
あやめとの心也されともうちは風ゆらかすてにほの心也
花はうきよにてあまたの草たつる事へ有とこそまうしあらん
のほりちるちりよれはきよとへんくとさるまた物あらうちりはに又
人もいてこぬいとこまやかにちさくめきかもしひ中も絶え
河舟　宗　花みえて月残りつつひかる事へ有ともまし源
ことありむ暮のうちきこえんかくある紀とも也
やくいろんまつたちてそうち絶ゆ女宮　玄　源氏とは事ある
をもしきまうたちく夕霧の事より出絶と夕霧
かへ絶也　細同
吹こる河風やまうかなた女宮もきみまつめへきんちまさされ
玄
む理は時也下心源のことをかれといとふより也　宗　夕霧かたき
西の心は野よふれ風のことに心り下れんは源の人をもりくるゆ

行水はさそふれ行くよ夕霧の心をかまんとまちるやまや
女宮にとは夕霧の我方をもしての絶へり
くらしくも雲そゆへり　宗　夕霧のたちてきくにはその奥
そぬとも源のうちまんし絶めてきくあるとの心絶へし
うちまんし絶をとほのきくに　玄　源のをもし行やされはめく
こき物うく杉くしとも也
月くきもの絶ゆくよれはなとかんそてまかりくれと
宗
夕霧れん也
ちくやきありやかたしなふりしとこひくたちさうぬ浅くへし
宗
源氏ちりくるそのそくと増きれなふしゃと夕霧まさ
ちさりと絶とも也
下露よよりひとつまりうそ女郎花もあくき風あは志われたくまつし
細
下露よあきつはあるき風にはたかくまつし信とも也我すり共

ひてなひきに給ひてよろこひくさきのんや　宋　源の事也すひ
こさ給ひくんめあもたち給ひしとやん六めや
ありけりとみん給へしあと　細　あひくにようて行きたるんや
弄同　宋　源氏乃詞也
ひかりて見や有なむ法ずくともかくもとて　宋　前の詞よりの大意
ハたちさるを行ともかれとも行てみて身をとゝく給ともん
ことにを此物語の毎事如此かけるたくひ打任し　細　花散里也
記んふし此ほかこれよりさそてとゝり給
常さのあさくむちもちをわきまへや物うちとなりとも待ひ
こちあまへりしあまくして　河　孫宴
けさひあく物の事ゆきつけてまさらわりへともあり
いとこさうくありくちちもちも物ハ　弄　御とうをそて
思ちをとるる物也法ふ御の後者とまうりちく如く

いとくハなにおひたるとの物ともなつかしきつけそきりの
常になつましきたちにくしきたる法なくて行ちらひ
またわりくしそなりしられ　細　ぬりあきたるとの新色枕
弟子かもとあり　河　古しぬいのはしし此もさハ御まつ給て
言てハ見まともなくてうたゝ也
いかやきのこの物あらくうちたるなとさきちくし給へり
河　延喜式紅花なとも袷などと麹塵色なとて　宋　おやなとと袷
名ありそめてうちたる也へし
中将のトうきより　細　源の事給也　宋　夕霧のためなと也
法あの後ハせんさいのこむもとまりぬらんかくなちくし
てん思まもあたにかうせくまんともさましうへさ秋あめりな
との給ひてくすみてうなくん法さくするもの名とも此いとさき
よくあれくやうなる事ハ　細　禁中此法おくはし有なれと

停止せしむる事也 抄 源翔閣裏にてつる物たちある
ともるにつきてそれをとゞまりてそれあることをほくし
吹の躰也 宗 清涼殿の東西へとをりたる廊のうへり
前栽ありて秋草花の盛なるも花の宴ありことしは吹ふ
の吹ちらしされは宴とあるまじされはまことにまことしき
事をおもしとや
盆の夕べなども物しくもとりしや物悩るも 宗 曇り上なども多くち也へ
涼なるとも涼しきこともなくしぬる也
清ちをよしうちはなれまいらせと 花 花文綾ハみなり花文之綾也謝
恵連詩云客従遠方来遺我雙文綾と云同文也或説曰
文綾也さまざましやなるといふもしもとかいは夏の衣といへ
始当時之穀の煙文なるを用也大略同じうちおもしあや
のもんあるをといふや 細 夏比衣也影文結なるといふこと

宗 花をとおんりわりとわめる儀也
此涼風をいふてしみる花にてもそれくしそめてそ行くつるいとあ
らまほしきいうたり 花 時節草此花を云夏の衣花
田り深き夜也 細 月草のことや 宗 常に涼しのもと
中将のそてかやうなるてハこゝを結なるわりきさ人の心をしめやかとりの
つまるるとやれなるを吹る結なる さりと結ぬ 細 涼の祠
宗 夕暮乃心をとめ吹そよくしめ源氏の河為なる似合し
かりきさんとようくんとの結く源結也
むつりしきかくしめとを結ぶとも見ありきて中将ハ御さ
心やまりうつりつの御しきそへるとをさまをめるをと云ひけり
宗 夕暮の心や見ろきさなる哀りうちて吹を云ん哉へ
此えの涼しくれをなりの結へり 宗 此え晩景の涼ま心へ野なるを云
夕暮したる夕暮此文かゝもちそとめ給ふ結也

まことあるまじきなんめりとて風ちかきを紛て見はさ
かゝれなき御かたはらに紛ハ物つゝみ給ふめのとそ見ゆる
細 御息所の御ことハ紛ハしきまゝにと也 宗 見そめけるを
紛てあり
御さえ心をかしうにとのおもはしきにつゝましうこそ紛る
を 細 夕霧の詞 宗 夕霧卿落葉の宮へ申さる御ことのおもむき
むとこそ思ひしかの紛也
宮はいとこゝろうけれハ何ゆへにかくしらるらん 花 三条は大宮の御
かたより御紛へりしほとゝきすなとつゝしみ給ひて中夕霧詞紛也
ひいなのことはなつかしき御ほとにてもおほえさんとの紛へりとこゝろえし
あつき事は御つかはるゝ物からしきて紛くさにおほむたちを
宗 夕霧はされてめのとの御紛ハ詞也 扇の風ならんかへりたれハ我
なれたるゆかしさをまてそのふとまりて見給ふのこと

のかすりなけれハその御あかりのまゝまことにこそ
されてめのとやなるへし 姫君の御かたの御かん
とゝもにあのとやかなりける心ちして
ほとくしうてこそ見給へるを給ふ心いとのあつかひの里
ひかへてたちふるまひて 河 おもしろく也
ちとくもしぬるや侍る 細 夕霧の詞
清つかの硯ところひ紛へし 孫 ちかき硯とも
清々しきかうのまきらはしきとまり御ふえこれからおもてへ
うつくしけれハ 宗 姫君のことつなへし
いかにされたまふこととの紛へと 細 松の枝ともの紛也
孫 夕霧卿下の詞也 宗 是ハ御ふたたる紙と夕霧卿紛也
山おもとくに御いもとのまきらはしくるのめたきことにて
さま紛しきれのうへやうあつまりのとし紛のあて

あしてのさまもちかひつゝうつくしきやうにかきまぜたるはひ給へるは
とよし　細　花なる物は姫君のおかしにかすれは親しみ給へるも
されと思ふのちと思ふはさのことさやうにいひなへきなれは
はおもしろこの夕霧の君の中なり　抄　山の水とくは物の風
や此硯紙（スリカミ）あてゝ文をうつしはまたかけ給ひてとも見えたり
あらぬ上のみなり給ひてもおほさん侍ともとてかき給也文
抄　細ニ　同
されとおもしろくかゝせまゐりてかく文字をさへ物し給へ
細　夕霧の君の口つきも儒業（ジユゲウ）と学のまさりたる学のさまなりて
ありし也と優（ユウ）なることのきたるも前の地也尋同
夕霧の君ようらくをも此絵あらくすへるおもし
抄　儒者はみなかきまゐらぬものや何の式かの我読あるの
を卑下して申たる詞也

尽させ給ひて雲井の雁なとよそるまゝ見くわしく建武本
細　此本のかく見えしたり　抄　夕霧の君もかきなれたるよし
を雲井の雁のなにとおもふもましてはとおもふにそ源
ぬれてかへる也
嘆くるをもあるかなやにつき給へるへてうらやましく給はこと
ふるまひてとくの人侍をれとも也　河　此交野（カタノ）少将かさ年来義
に事（コト）旧（フリヲハニヌ）彼かゝね無双（ブサウ）の色好（イロコノミ）なりけるとて艶（エニ）書本
あるもの名もたえまて同じ色の紙にて書付たるにまかれ
るなりや此物語の中にもかく通（カヨ）ひ女君にて源氏殿歟〈上本〉
らまし此ほの紙の文をもて紅葉に付てたる事葵巻
まきなり宮の御方へ白き薄様（ウスヤウ）あかく菖蒲（アヤメ）の根に付たる若
菜上　源氏女三宮へ白き紙なる文（フミ）梅に付浮舟巻
文ありやゝ浮舟の方へ此ほの薄様に梅に付て

是源中将もくり しらさまめ人なれハさたかならぬとれかし
おもひわかさるを見るとふられぬるや 花 花ハ岩乃落
枝にかくる所にや仁付たるか紙のかきよたつひたると
へくとかめきるも万乃しめゆかと云物語にもなへつ
されとひちりしかくてのとひゝきにふりわけての山吹の
是にほひなきよれと紙乃色りかるこそおかしけれ
とて山吹はつま紙のくおおすやかんと案定繁
おもいハ紙乃かめり仏合多ある枝に付るを夕霧か心よ
ハ心しらと志かる人のしも何ゆて色も時にしるかひき
る花に付へきと云給へるにめや 細 ゆかし婦人への云
や花乃色に紙乃色めをもとへのへなるや 抄 一巻にみるに
同好き乃人や宗祇しゆ筆の紙にかさ紙をひさるも
とてそ付侍るとかや

さもあるまじう見えて見のひかりたるかなや 細 夕霧早下也羽

弁同

このちの歌人の保ときは花よまと 細 このちのかゝる花よ
清くとまりそのりとかれ紙にや 花 いく見ハ雲井
頭人なる人の 抄 花乃歌の中花の羽と早下なれも
いくのへの花をもつくに付んうと見しててとり
とひ給ふや花ほめたる給つる奥ほるらんはうひするや
宗 いつくれ歌色のつるなる花に付てよろこんて秋の
為もとしきく経へと夕霧か物ほめきての給洞
花 いつくれ歌人の保とりあかく有りやんなる文もる
されハかしと物ほめきてちへく給へるも
かれ人てあとさとまくなに見てへふてくへうとよてなさ
まいとまかくしうあそうし 宗 女房とも夕霧に羽をとら

けておれぬともおもふまでこそあはれなれうちすてゝ行なり
をらくしとをいたまてるはさおろくもすゝろ夕霧はをを
たりしとや
みちの路に　昇　一段ハ雲井寺のうへ一段ハ文字にかきまと
へ段ハしきしマ文にゆかしても　細　色ハおもかけとよる人し
むら花も花に路ハれにわたくさまうこゝろハすこうとまゝれるゆる
ゆふへのしんうとにうちさひしめきてとりゆるとやうらへく
たゝあふさきてゆふの家　むら花まを　細　夕霧の宿へ也
杬
雅とおもふるし夕霧の意得也
わするゝ路とてへんうちそらかれ九性ひさまなりきる
とまて　花　明ん晩天の曙乃涛くらまてをこそへとるまゝ
行也　細同　宋　ろよかくをとさぬ也
見つる花乃かけとともにいふりてへんまかりてもえすとまの

うちへぬ心ちにあまりちにはなくのみをとひきゝて九
性の住ころむらうそれハ　宋　此花ハ桜也鶯ハ山吹よ
きさへし花の住ともに路しよ此明ん乃娘天を見
まつらせてかへくへされとの夕霧れん也常あてゆかう
よ見れ花ともなハ行りし娘天なれともけ花上也鶯をと
見わくやうにつきり相ともまて家ともゝよあるをちり
のをまて行なへし
そのくそまよまうとたくくもひるとも路より住ともおとゝろちん
をくるへのさけくまゝへも何のあやめとも見へぬ猶よいと
こゝろすとるし　そのくそそ　宋　陳子なるとのつゝや
うちをされ住そたりぬれまくさをゝみきもちくれぬるもとまをのひ
きかろをそあらやうゝみてるとほそくちれきうれやうたんら
うつきたんくらつしおとくしまをゝハ武さしにほのうんをまし

にほひまさりけれはわかひまさりたる給ふあらはしましてかうらい
かるらんかしとおもひけれは此梅山かさとかく
うきよの御ににに 末 うきよのおもひも捨るへし
これは夜の花とやいふへからんこゝろはあらさりけるにて
聞りすひとある句もひへかくて有かしとおひゆるへからうく
なる人くを心よまけるをて明石の君まゐりたらや 花 明石姫君
をとも有りとへあつらゆかりれの下にあたも有
末 明石姫君をも夕霧有りたと人給ひへし 夜花は何とや
らんもとりし花ちまれはとへ給ふや
さとあるとめへきほとおもひて 半 紫上も姫君とりまて
夕霧此明石の君の給へこそとてとうまきあれと源氏の心を紀
終て見ゆをとなましきを給ひたぬるすをいふ 細同
為るそくれなきやうめるこそはゝかられるとそれ

末 源氏のうちまたの御事めをも心あてにて給ふはゝかりまての
夕霧乳母をとさやかなるをへまさりたる給ふんや
まめ人をとおまあくるすて心ちよき 末 実人の夕霧をと源をと
惜とあり
わかものゝ御事もとめとも来りたれとのこゝやかにかくはならさ
有ひしといとかうしきわらへるとこてあもとはつかくをもてなし
有らひはりそくてい 細 三条宮也 末 夕霧此宮をあらせ
乳母なとすれとも出しさゝやかなり
さうもなるけさたにそ御ゆへくも何しとそらてらちかさあ
まうさちれもうんてあまやうれあるそ 末 紫上明石姫君
玉鬘なとの称御かたへよろこれいへくのさ后をとて
つまこゝるやそれ夕霧乃んや
く有ありつまて給ふかにあらくはそれありちる 末 かく

ちすみ尼君ちゐやつれゐてらるゝ大宮の御時めり御あひ
ゐつかやちるゝとも世をうもしそれゝゐて中
くゝ哀ゐとの夕霧のゐや
内の御ゝとまうり給つる御中ゐゝちもまゐりてのと
ゆくに法ものゝゐとゐるとゐし給 宋 内府乃を申とうり
ひ給ゐんとて翌日(ヨクシツ)は夕つゝさ大宮へ出也とや
姫君をとゐゐしく見ゐまゐぬつわきまりと思ひてゝそく
ちゐさしにゐゐ給ゐ 細 雲ゐ給をも久しく見ゐまうらしを
宮ゐの給や 宋 君をと 細 雲井給をも見給ゐぬら慈
しきとゐの給や
とこれ法乃ほどに来ゝせん 細 内大臣詞 宋 雲ゐ給此所
とにつ遣来ゝせんとや
ゐつゝもの御とりゝをゐて 細 夕霧のゐすとゐくめ也

宋 雲井給乃ゐはゝゝとも夕霧は下ゐのゐるにゝう夕
霧はゐ給へ大内府乃縁うちその給詞也
ゝちわしう御とゐへゐてすん給めるをゐなゝゝそゝくそ
ハもちゐへましきもの有りゝれと 宋 夕霧ありゐさ
うせゝ進て雲井 給の不思議(ヒケツ)真なるゝに似る
との給詞也
何ゝにつきゝゐとんのゐゝれはくさを給り有るゐと
宋 女子はゐるにつきそてとや
有我心ゝをしはむひとゝさゐるゝしきしての給へと
宋 夕霧有雲井給乃ゝとを内府乃ゝちゝをを給ゐゐ也
ゐゝゐとゐせちゐと出ゝし給ゐは 細 文の御返也
宋 大宮乃ゐや雲井給をと見給ゐとも切ゝゐたゝゝの
給ゐゐゐ也

それはつてありやと案てうたかひもとめまうきを待てまて
まうつくしきへぬと　細　内府の詞と以君にしとや　河　不詞
うきへ行てまうつひ語とやいておふ給やし　栄　内府中惑
し給とのんや
むすめやつてあしてして　細　やさしの姫むすめといひてとや
栄　大宮此の語ハさしかう内府乃息女ちうよくいひくきゆり
ありあしくいはくしものをとや
ちかう給やうやあうやの語へも　栄　まうつさ事へあう
しやや
それなんつんくるしきことに侍るいりて御らんせさせんと
細　内大臣乃詞　抄　内府詞也此給文始也　栄　内府の詞さ
てこそつんくるしきすれとや大宮へいりてうつせ
まうくせんとの語や

やのし語とや　弄　此語の道乃巻為色かくへてゆつて
けしき式アヵ自作あくぬうしとのまうさむかうしく
細　式ア我云るにとうくしてあるまり来くにけんつて
まうかりや　抄　御式アのんはうひや甚深やく